# 『ジョナサン・ワイルド』の周辺 (2)

飯沼　馨

## 2

(1)で『ジョナサン・ワイルド』が、いつ書かれたかの問題を考えてみたが、つぎに私は、フィールディングがこの小説でウォルポールを諷刺するまでの、彼とウォルポールとの関係を跡づけてみたい。いったい、『ジョナサン・ワイルド』の価値は、そのなかに盛られた辛辣な諷刺が、ウォルポールへの諷刺から出発しながら、彼個人を貫いて、民衆に不幸をもたらす「偉大さ」一般への諷刺にまで高められているところにある。また、それゆえにこそ、この小説は、現代においても、なお、その価値を失っていないのだが、しかし、その諷刺のきっかけが、ウォルポールを足がかりにしていたことは事実である。それでは、この作品を生むに到ったフィールディングの反ウォルポール活動は、それがこういう形で具現されるまでに、どういう経過をとっていたのであろうか。

ロバート・ウォルポール (Robert Walpole, 1676—1745) は、ノーフォーク (Norfolk) の地主の息子として生れ、早くから政界に身を投じた。彼の財政的手腕は人びとの認めるところであったが、彼を一躍有名にしたのは、かの南海泡沫会社事件(一七二〇年)で、この難局収拾に示した、その手腕によって、ウォルポールは一七二一年に、かって一七一五年についたことのある国家財政委員長 (the First Lord of the Treasury) 兼大蔵大臣 (the Chancellor of the Exchequer) の地位に復帰し、その後四二年までその職にあった。彼は最初の総理大

臣として知られているが、ウォルポールはウィッグ党内の穏健派ともいうべき立場にあり、変化や革新を忌みきらい、quieta non movere (not to interfere with things that are at rest; let sleeping dogs lie.) をモットーとしていた。彼は、その在職中、対外的には平和政策、対内的には協調主義をとり、ウィッグ、トーリー両党の利害を、たくみに協調させた。つまり、地主階級と商工階級の利益の調和をはかりつつ政治を運営して行くところに彼の才能と手腕があり、またそれが時代の要求に合致した。一七四〇年頃から、海外市場獲得のための武力的な海外発展の要求が商工階級を中心に高まるにつれて、ウォルポールの確固たる地位は次第にくずれ始めるが、ウォルポールの時代に、イギリスの商工業、貿易など、経済的な面における、いちじるしい発展がもたらされた。常識的、実際的な現実主義者であったウォルポールは、このように、たしかに有能な政治家ではあったが、彼は、争いを避け、妥協と懐柔を旨とし、人びとの支持をえるために贈賄をちゅうちょしなかった。そのため、金や官職による買収が半ば公然と行われ、その政治は道徳的腐敗を生んだ。かかるウォルポールの買収による選挙、政敵を変節さすための、現金や官職の贈賄、さらに彼の情婦マリア・スケレット (Maria Skerrett) との情事などは、ウォルポールに敵対する人びとによって、たえず槍玉にあげられた。

トーリー派の人びとや文人がウォルポール一派を攻撃したのは当然だったが、同じウィッグ党に属する人たちのなかにも、反ウォルポールの陣営に参加するものが出てきた。ウォルポールに対する反対派は、まず、政府派のウィッグ党員と政治的見解において大差はないが、ウォルポールになんらかの不満をいだいている在野派のウィッグ党員、ハノーヴァ王家派のトーリー党員、および、ジャコバイトたち（ステュアート王家支持者）の連合からなっていた。彼らは、それぞれ、意見を異にしたが、ウォルポールの政府を倒したい欲求において一致していた。不満をいだくウィッグ党員の指導者はウィリアム・パルトニイ (William Pulteney) で、彼は機智と学識と

弁舌にめぐまれ、かってはウォルポールの親友で支持者であったが、小心で、一七二四年に国務大臣になることを拒否されて、反ウォルポール派に走ったと言われる。反対派のトーリー党員には、サー・ウィリアム・ウィンダム（Sir William Wyndham）がいたが、この反対派を背後であやつっていたのは、かの有名な陰謀家ボリングブローク子爵ヘンリ・スィンジョン（Henry St. John, Viscount Bolingbroke）であった。彼らは、自分たちを「愛国者」（the Patriots）と呼んだが、彼らのなかには、ウォルポールと政見を異にし、彼の不正選挙や贈賄行為に公憤を感じていたものもあったであろうが、なかには権力欲にもえ、ウォルポールに取って代ろうとする野心家にすぎぬものも数多くいた。

このような政治的分布図を背景にして、フィールディングの反ウォルポール的な姿勢は、どんな風に形づくられて行ったのだろうか。

フィールディングが一七三一年三月に、前年四月に上演した『トム・サム』（*Tom Thumb. A Tragedy*）を三幕に書き直して、『悲劇中の悲劇、偉大なるトム・サムの一代記』（*The Tragedy of Tragedies; or, The Life and Death of Tom Thumb the Great*）と題名をかえて舞台にのせたとき、当時 the Great Man と言えば、反対派がウォルポールを皮肉った言葉だったから、彼がこの芝居で、ドライデン（Dryden）、バンクス（Banks）、リー（Lee）、トムスン（Thomson）流の「英雄悲劇」ばかりでなく、ウォルポールをも皮肉る意図を抱いていたのは事実のようだが、その作品にあらわれた当てこすりは巧妙にかくされていて、政府側の干渉を惹起するほど直接的ではなかった。しかし、高まりつつある政治的争いのなかで、まもなく、フィールディングは、はっきりとした政治的諷刺を舞台にのせ始める。ウォルポールと反対派の争いは一七三一年をむかえると、いよいよ熾烈さを加えてきていた。反対派は一七二六年にニコラス・アムハースト（Nicholas Amhurst, 1692—1742）を主筆

として機関誌「クラフツマン」(*The Country Journal, or, The Craftsman*) を発行していたが、その「クラフツマン」紙の政府糾弾はますます激化し、両派の争いは、パンフレット戦にまで拡大されるに至った。そして、三一年の一月には、ウォルポールの支持者ジョン・ハーヴェイ (John Hervey) と、パルトニイの間に決闘騒ぎまでひき起された。

フィールディングが三一年四月に舞台にかけた『ウェールズのオペラ』(*The Welsh Opera, or, The Grey Mare the Better Horse*) は、ウェールズに住む、ある地主の家庭的出来事になぞらえ、宮廷を背景に、ウォルポールとパルトニイの政争を、執事のロビン (Robin) と馬丁のウィリアム (William) の争いとして、露骨に皮肉ったものだった。ただ、ここで、フィールディングがウォルポールばかりでなく、反対派のパルトニイらをも揶揄嘲笑していることは注目に価する。フィールディングはこれをさらに書き直し、『グラブ街オペラ』(*The Grub-Street Opera*) と改題して六月に上演しようとしたが、ウォルポールは、かかる大胆きわまる諷刺を圧迫しようと決心したのであろう、この上演は、宮内長官 (the Lord Chamberlain) の命によって禁止された。

その後、フィールディングは、一七三四年四月に、『英国におけるドン・キホーテ』(*Don Quixote in England*) を舞台にのせるまで、政治的諷刺を一時放棄する。フィールディングの露骨な政治的諷刺への復帰を示すこの作品は、かって彼がライデン大学時代に書いたもので、劇作家として立ってからのち一七二九年にドルアリ・レイン座で上演して貰おうとしたが不向きとして拒否されたものだった。彼は、この作品に、当時の政治的情勢に合わせて、新しい三つの情景を加え、地方選挙の贈賄收賄による不正と腐敗を暴露諷刺した。このファース風の軽歌劇 (ballad-opera) がチェスターフィールド伯爵 (Philip Dormer Standhope, fourth Earl of Chesterfeld, 1694—1773) に捧げられ、その献辞のなかでフィールディングが、芝居はエッセイよりも、「一般的腐

敗によって国家にもたらされた災禍」を公衆に意識させるのに役立つことを暗示し、反対派がのぞむ場合には、自分の劇作を、反ウォルポール活動の一助として、反対派のために役立てる用意があることをほのめかしているのは興味深い。

チェスターフィールドは、広大な領地を有する名家に生れたが、風采は上らず容貌はきわめて醜かった。しかし、洗練された優雅な紳士で、機智にとみ、才能、学識、弁舌にめぐまれていた。このチェスターフィールドは元来ウォルポールとそりがあわなかったが、一七三三年にウォルポールが物品消費税を賦課しようとしたとき、これに反対したために宮内大臣の職を追われ、反対派の指導者に加わり、その後十一年間、上院における反対派の闘士となった。フィールディングがこの芝居を上演したときには、チェスターフィールドが、宮廷におけるその地位を追われて、反対派に参加し、新聞などでウォルポールを攻撃しているときだった。このときにフィールディングがチェスターフィールドに舞台からの援助を提供してもよいと暗示したのは、どういうことだろうか。

というのは、フィールディングは、かって、ウォルポールに庇護を求めたことがあるのを、われわれは想起せざるをえないからである。フィールディングは、一七三一年の『悲劇中の悲劇、偉大なるトム・サムの一代記』や『ウェールズのオペラ』で、ウォルポールを諷し、さらに追打ちをかけて、『ウェールズのオペラ』を書き直した『グラブ街オペラ』を上演しようとして、これを禁止されたあと、一七三二年二月に『今様(いまよう)亭主』(*The Modern Husband*)という本格的な喜劇を舞台にかけた。この芝居は失敗に終ったが、これは、驚くべきことに、ウォルポールに献げられ、その献呈書簡のなかで、フィールディングは彼に讃辞を呈し、彼がその愛顧を文人たちにもおよぼすよう懇願した。これは、文学に無関心であったウォルポールへの皮肉とも受取れる。だが、フィールディングは一七三〇年と三一年に、なかば冗談、なかば真面目な、ウォルポール宛の揶揄的滑稽詩——

この二つの詩は『雑録集』に入れられた――を書いて、その愛顧をうけてもいいそぶりを示している。それだから、この『今様亭主』の場合も、ウォルポールが、彼のいままでの諷刺にこだわっていなければ、その庇護を受けてもいい、という、至極虫のいい気持も、どこかに動いていたのかもしれない。もちろん、ダドン教授も推測しているように、フィールディングの再従姉にあたるメアリ・ワートリイ・モンタギュー夫人（Lady Mary Wortley Montagu）のすすめがあったにちがいないが、フィールディング自身、いかに人を喰っているといっても、心から本気でそのような期待を持っていたとは考えられないだろうし、事実、それは無駄であった。

さて、こういうことがあったあとで、さきに記したように、フィールディングが『英国におけるドン・キホーテ』の献辞で、今度はチェスターフィールドに援助を申込んだのは、どういう考えからであっただろうか。当時、文士が有力者の庇護を求めることは決して珍しいことではなかったが、フィールディングがウォルポールを諷刺しておきながら、そのあとで本気で彼の庇護を求め、これに失敗すると、こんどはその腹いせに、反対派のチェスターフィールドに乗りかえようとしたのだとすると、フィールディングは、まことに無節操な、厚顔無恥な人間と見なされざるをえない。しかし事実は、そうではなかったと思われる。

というのは、フィールディングが『悲劇中の悲劇』や『ウェールズのオペラ』を上演し、さらに『グラブ街オペラ』を舞台にかけようとしたとき、彼はたしかに反ウォルポール的ではあったが、同時にまた、反対派に対しても懐疑的であり批判的であった。それは、『グラブ街オペラ』でも、両派の指導者たちを批判し、一人物の口を通して、ウォルポールが他の者よりも人をだましたとすれば、それは、だます機会が多かったとしか考えられない、という意味のことを云わせていることからもわかる。フィールディングは、この頃クロス教授の云うように、[註①]おだやかな程度において、政府に対して不満をもつウィッグ党員の側に立っていた。しかし、彼の政治的事

件のバーレスクは、ほとんど raillery の域をこえないものであって、彼がこの頃にウォルポールを諷しようとしたり、当時の政争を取りあげようとしたりしたのは、もちろん、かかる醜悪な面に反撥を感じたわけではあるが、同時に彼は一方で、ジャーナリスティックなファースの作者として、一般の興味に便乗しようとする傾向も強く働いていたであろう。そして、おそらくモンタギュー夫人の忠告もあって、『今様亭主』をウォルポールに献げたときには、彼が自分に好意を示すなどとは本気で考えてはいなかっただろう。

しかし、チェスターフィールドに援助を申込んだときには、フィールディングは本心からであったと思われる。というのは、一七三三年になると政治的情況は変化した。彼の尊敬するチェスターフィールド――フィールディングは、一七三四年一月上演の『小間使の陰謀』(*The Intriguing Chambermaid*) の脚本を出版する際につけた「クライヴ夫人への手紙」で、チェスターフィールドのことを「当代の最もすぐれた劇評家、最も偉大な人物の一人」と云っている――が、ウォルポールと最後的な仲たがいをして、反対派に参加したからである。ここで、フィールディングの気持は、チェスターフィールドの参加した反対派により一層近づき、「自由」と「真の愛国心」の持主であるチェスターフィールドと手を結ぼうという気持が強く働きはじめたのであろう。もちろん、伯爵と協力し、その庇護をえて、生活の安定を計ろうとする気持もあったではあろうが。

さて、今までのフィールディングの動きをわかりやすく、もう一度書くと次のようになる。

一七三〇年と三一年にウォルポール宛の揶揄的滑稽詩を書いて、その愛顧を受けてもいいそぶりを示す。

同三一年三月、『悲劇中の悲劇』で暗にウォルポールを皮肉る。

同三一年四月、『ウェールズのオペラ』でウォルポールとパルトニイの政争を露骨に皮肉る。

同三一年六月、これを書き直して改題した『グラブ街オペラ』は、政府によって上演を禁止さる。

同三二年二月、『今様亭主』をウォルポールに捧げ、彼に讃辞を呈してその愛顧を文人にもおよぼすよう懇願する。

同三四年一月、上演の『小間使の陰謀』を出版する際、それにつけた「クライヴ夫人への手紙」でチェスターフィールドに讃辞を呈す。

同三四年四月、『英国におけるドン・キホーテ』で、地方選挙の腐敗を諷刺し、これをチェスターフィールド伯に捧げ、反対派のために自分の劇作を役立たせる用意のあることをほのめかす。

ダドン教授は、フィールディングが、『小間使の陰謀』の脚本出版の際につけた「クライヴ夫人への手紙」で、それとなくチェスターフィールドをたたえたのち、『英国におけるドン・キホーテ』でウォルポールのやり方を批判して作者が反対派に好意を持っていることを示し、そして、それを出版する際にチェスターフィールドに献辞を呈し、彼をたたえて伯爵を援ける用意のあることをほのめかした、その反対派の首領への接近の仕方は diplomatic だと評しているが、[註12] たしかに彼が反対派に自分を推挙し援助を申し出た、その方法は、なかなか巧妙で、拒否された場合にも恥をかかぬだけに遠まわしで用心深かった。しかし、これらに現われている気持は、当時のフィールディングの気持として、そのまま素直に受取ることができるだろう。

このフィールディングの申出はすぐさま受け入れられなかったが、チェスターフィールドはフィールディングの意図を完全に理解し、やがてフィールディングと反対派の結合は、二年後に緊密な形をとるに至る。

その後、ウォルポールと反対派の争いは、依然として続いたが、一七三五年にウォルポールは、反対派の機関紙「クラフツマン」紙（*The Craftsman*）に対抗し、政府の政策を一般に知らせるために「デイリー・ガゼティア」（*The Daily Gazetteer*）を出し（印刷者はサミュエル・リチャドソン）その地位は、ますます安泰だった。

一方これに反し、反対派（当時 the Country Party と呼びならわされていた）の方は、三四年の総選挙にやぶれたうえ、一七三五年の夏には、黒幕のボリングブロークがフランスに引退してしまい、一向に気勢があがらなかった。上院では、カーテレット（Carteret）とチェスターフィールドが重要な反対派だったが、両者とも才能はあったが、指導者としての手腕にかけ、下院では、ボリングブロークの引退によって、ウィンダムとパルトニイの協力も弛みがちだった。しかし、上院で、チェスターフィールドが有能な支持者ベッドフォード公‖ジョン・ラッセル（John Russell, fourth Duke of Bedford, 1710—71）を見出し、下院の反対派は、三五年に、ウィリアム・ピット（William Pitt）とジョージ・リトルトン（George Lyttleton）という、二人の若い才能ある政治家を迎えた。ピットとリトルトンは、フィールディングのイートンでの学友で、のちにベッドフォード公とともに、フィールディングの親しい友人、援助者となるのであるが、彼らに対するフィールディングの尊敬も、ひとびとによく知られている。いずれにしても、かかる情勢のなかで、フィールディングは、はっきりと反対派と手を握ったと見なされていいだろう。

こののち、フィールディングは、一七三六年のはじめ頃、ヘイマーケット小劇場（the Little Theatre in the Haymarket）に拠り、座附きの役者たちを再編成して、これを「モガル大帝英国喜劇役者一座」（The Great Mogul's Company of English Comedians）と名づけた。こうして彼は、いまや、自分の劇場と役者を持ち、自己の本領である諷刺的なファースで、自由に政治諷刺をおこないうるようになった。最初に彼が上演した芝居は、三月に上演された『落首——芝居による現代諷刺』（*Pasquin; a Dramatic Satire on the Times; being the Rehearsal of two Plays, viz. a Comedy call'd The Election, and a Tragedy call'd The Life and Death of Common-Sense*）だった。

彼の芝居のなかで最もすぐれているものの一つと云われるこの芝居で、フィールディングは、その時代の買收による腐敗選挙をあばいたが、彼は、なお、両派に対して比較的公平な立場をとっていた。というのは、政府派と反対派の相違を、前者が公然とワイロを使うのに反し、後者はそっと袖の下をつかうところに置いたからである。

その翌年、一七三七年に、フィールディングは、劇場、社会、および政治上の重要事件を扱ったファース、『一七三六年の歴史的記録』(*The Historical Register for the Year 1736*) を三月二十一日ごろにヘイマーケット小劇場にかけ、四月十三日には、これの「切り狂言」として『ヒスされたユーリディス』(*Eurydice Hiss'd, or, A Word to the Wise*) という一幕物の mock-tragedy を加えたが、この二つのファースには、ウォルポールへの諷刺が、露骨な、はっきりした形で盛られていた。まず、フィールディングは、『一七三六年の歴史的記録』のなかの劇場情景(シーン)の一つで、ウォルポールが、唯々諾々と彼の指図に従う追随者に官職をわかち与えて、強引に自分の政策を実施させる、そのやり口を暗に諷した。そればかりでなく、さらに、政治的情景のうちの、「愛国者のおどり」("The Dance of Patriots") として知られているシーンでは、ウォルポールの専断的な秘密主義や、課税政策や、彼が「反対派」—「愛国者たち」('Patriots')—にワイロをつかませて変節させる狡猾な方法などを揶揄諷刺した。しかし、それと同時に、ワイロ次第でウォルポールの笛に合わせてどうにでも踊りをおどる「愛国者たち」のなかのハーヴェイ卿 (Lord Hervey) のような連中の無節操ぶり——彼は金と宮内大臣の地位を贈られて「反対派」をすてた——を嘲笑した。『ヒスされたユーリディス』では、表面的な劇場の風習の諷刺のかげに、主人公である劇作者の劇場主ピレッジ氏 (Mr. Pillage) を通して、ウォルポールが腐敗した多数をたのんで、うたがわしい諸政策を専横的に実施するやり口への諷刺がかくされていたし、ウォルポールの失墜

さえ仄めかされていた。フィールディングは二年間に、このように「反対派」のために援助の手をさしのべたが、特に、ウォルポールとその内閣に対する大胆な諷刺を含むこの二作は、フィールディングを「反対派」の辛辣な諷刺家たらしめた。しかし、政府の方もかかる政治的諷刺に対して次第に神経をとがらせ始めた。そして、政府側の機関紙「デイリー・ガゼティア」は、五月七日号で、ある政府側の有力者――枢密顧問官のハーヴェイ卿だと云われている―が、フィールディングに非難と警告を発した。フィールディングが、自分の、かかる直接的、侮辱的な諷刺が、重大な結果を招致すると思っていなかったことは、彼が、五月十二日に、この二つの芝居をのせたパンフレットを出版していることからもあきらかである。これまでに、一七三三年と三五年にも演劇取締法案が提出されたことがあったが、これらの法案はその都度ほうむり去られた。フィールディングは、自由を愛するイギリスで、かかる企てが成功することはないと、タカをくくっていたようである。しかし、一七三五年以来、情勢は変化していた。すなわち、ロンドンの劇場が、「反対派」のウォルポール弾劾の機関となる風潮が高まってきて政府を刺戟していたうえに、運悪くフィールディングにとって不測の出来事が生じた。というのは、一七三七年二月五日に、チェスターフィールドたちは「クラフツマン」紙の姉妹紙として「コモン・センス」紙(*Common Sense; or, The Englishman's Journal*)を発刊したが、三月になって同紙に、「拝金宗の夢」("The Vision of the Golden Rump")と題する、きわめて口ぎたない、政府への諷刺文が掲載され、さらに、五月に、これに取材した *The Golden Rump* という二幕物のファース―ホラス・ウォルポール(Horace Walpole)は、このファースをフィールディングに帰しているが、これは一般に否定されており、作者は明らかにされていない―がリンカンズ・イン・フィールズ(Lincoln's Inn Fields)劇場主ヘンリ・ジファド(Henry Giffard)のもとに送られ、これをジファドがウォルポールに提出するという事件が起ったのである。

この事件は、ウォルポールに、劇場の放埒さを抑圧するための充分な口実を与えた。彼は、五月二十四日に、下院に **the Licensing Act** として知られた演劇取締法案を緊急に提出した。下院ではバルトニイが、この法案は、内閣への都合の悪い批判を沈黙させる意図を持つものだとして反対し、上院では、チェスターフィールドが、かかる法案の不必要を力説し、これは出版の自由、さらには自由そのものの破壊への一歩であり、機智という一種の財産の侵害でもある、と反対した。しかし法案は彼らの反対にもかかわらず、両院を通り、一七三七年六月二十一日に国王の裁可をえた。その結果、リンカンズ・イン・フィールズ劇場、グッドマンズ・フィールズ（**Goodman's Fields**）劇場、ヘイマーケット小劇場など無免許の三劇場が閉鎖された。フィールディングはこのために、この法令の直接原因と見なされるようになったが、彼もまた、これからという時に劇作の筆を折らねばならなくなった。

その後、フィールディングは方向転換をよぎなくさせられ、一七三七年十一月に法学院（**the Middle Temple**）に入学、一七四〇年六月二十日に、弁護士の免許をえた。一方、ウォルポールの方は、一七三九年十月に、主戦派に押されて、よぎなく、スペインに戦争を布告せざるをえないはめになった。これは、イギリス商人が海外市場獲得のための武力的な海外発展の段階に入ったことを示すものであり、平和をのぞむウォルポールに代って、かかる勢力を背景とするウィリアム・ピットの時代が到来しはじめたことを意味した。「愛国派」は対スペイン戦争の布告を歓呼してむかえた。スペイン開戦は彼らの党派的勝利を意味したが、しかし彼らは、ウォルポールを倒すことはできなかった。ウォルポールは、王の頼みもあり、権力欲も手伝って、この事態を自分が收拾しようとして辞職しなかった。しかし、両院でのウォルポールの勢力は急速に弱まった。「反対派」の二つの機関紙、「クラフツマン」紙と「コモン・センス」紙は、二つとも順調にいっていなかったので、反対派としては、

いまや反ウォルポール熱をあおるために、新しい機関紙の必要にせまられ、フィールディングを主筆とし、ジェイムズ・ラルフ（James Ralph）を副主筆として、一七三九年十一月十五日に、「チャムピオン」紙（*The Champion; or, British Mercury*）を発刊し、あらゆる機会をとらえて、ウォルポールとその内閣を攻撃した。フィールディングが一七四〇年六月に弁護士となると、この新聞への寄稿は減少するが、彼は、四一年六月まで、この新聞を編集し、その後は、一七四四年の廃刊までラルフが引きついだ。この「チャムピオン」紙の政治面は主としてラルフの受持ちだったが、フィールディングも政治的腐敗に対しては攻撃の筆をとり、数度にわたってウォルポールを、直接的な攻撃はさけたが、皮肉ったり、嘲笑したりした。

そのことはクロス教授やダドン教授が指摘しているが、[註③] たとえば、フィールディングは、ウォルポールの立派な邸宅、すばらしい絵画蒐集、見事な馬車などを不正行為の報賞とみなし、これらのために彼は良心と国を売ったと暗に諷したり（一七四〇年三月十一日号）、[註④] ウォルポールが人びとにワイロをつかまして自分の思い通りにするのを皮肉ったり（一七三九年十二月十三日号）、[註⑤] ウォルポールを裁判にかけたら、その告発状はウェストミンスターからロンドン塔に達するほど長くなるだろうことをほのめかしたり（一七四〇年五月十七日号）、[註⑥] ウォルポールは金を取ったり、友人に贈ったりして、貪慾な金銭崇拝者どもから神のように崇敬されていると暗に嘲笑したり（一七四〇年六月二十八日号）、神よ、われわれを宰相から救いたまえ、と茶化したり（一七四〇年五月八日号）、[註⑦] ウォルポールを、「幸運と呪うべき悪徳によって権力の座についた卑しい男」とあてこすったり（一七四〇年六月十日号）、[註⑧]「国中で一番腹黒い、邪悪な男」と呼んで、その終焉と裁きの近づいていることを警告したり（一七四〇年五月三日号）、[註⑨] した。

フィールディングは、かかる辛辣な悪口を「チャムピオン」紙でウォルポールに浴びせたが、一七四一年一月

七日に出した『真の偉大さについて』（*Of True Greatness*）――*Miscellanies* に再録――という長い英雄詩につけた序文で語っているように、この頃にはウォルポール派から、「反対派」を去って「嘲笑の才」を「反対派」の指導者たちに向けてくれと誘惑の手がのびていたようである。しかし、フィールディングはこれを斥け、あくまで国家のためにその筆を用いる覚悟をかためていたらしい。そして、一七四一年一月二十二日には『ヴァーノン頌』（*The Vernoniad*）――*Miscellanies* に再録――なる英雄詩を書いて、エドワード・ヴァーノン（Vice-Admiral Edward Vernon, 1684―1757）をたたえる一方、ウォルポールを攻撃した。ヴァーノンは議会でウォルポール攻撃の旗頭の一人だったが、当時のすぐれた提督で、一七三九年十一月にスペインのアメリカ植民地の港ポルト・ベルロ（Porto Bello）――スペインは攻撃を予期せず、ここの守備はきわめて手薄だった――を占領して、英国民の賞讃をかちえ、人気者となった。しかし、その後、ヴァーノンの要請する兵力補強がのびのびとなり、「反対派」は、これはウォルポールが国民の人気者となった彼の憎らしい政敵をわざと困らせているのだと主張し、フィールディングもそのように信じて、この詩を書いた。そして彼は、この詩の中で、ウォルポールを、悪魔につかえて、風の神にワイロをつかませ、ヴァーノンのもとに艦隊が送られるのを阻止する「富の神」（Mammon）として諷した。

一方、「反対派」は一七四一年二月に、ウォルポールを追出す動議を下院に提出したが、一七四〇年六月のウィリアム・ウィンダムの死以来、「反対派」のウィッグ党員とトーリー党員の結束がゆるんでいて、この提案をトーリー派が支持しなかったために、二九〇対一〇六で、この企ては失敗に終った。しかし、夏の総選挙を前にひかえて、ウォルポール派と「反対派」および、それぞれ両派を支持する文筆家のあいだの争いは、ますます激化した。フィールディングもこれに参加し、一七四一年四月に「愛国者」の匿名で、説教の形で書かれた『危

機』(*The Crisis*) というパンフレットを出し、悪魔の代理人であるような大臣を支持することを拒否して、われわれの自由と財産を守ってくれる人たちを選挙するように呼びかけた。総選挙は四一年の夏におこなわれ、両派はやっきとなって選挙民に働きかけ、ワイロが大規模に用いられた。結果は、「反対派」が大幅に増大し、ウォルポールは疲労のために病気になった。この選挙によって、両派の勢力はほとんど伯仲し、その争いはますます激しくなった。かかる重大な情勢のうちに迎えた十二月に、フィールディングは夢物語の形で、『反対派』(*The Opposition: a Vision*) という寓話的な物語を書いた。

フィールディングは「チャムピオン」紙や種々の政治的パンフレットでウォルポールをはげしく攻撃し、「反対派」の連中に――『真の偉大さについて』が示すように種々の風評のあったドディントン (George Dubb Dodington) にさえ―賞讃を惜しまず、その「反対派」支持は年とともに次第にはっきりとなってきていた。しかし、思えば、フィールディングは、かって、『グラブ街オペラ』や、『落首』や、『一七三六年の歴史的記録』において、ウォルポール派を諷すると同時に、「愛国者たち」に対しても諷刺をおこなってきた。このようなフィールディングは、この選挙とその後における「反対派」の行動を見て、その多くの者の利己主義、貪欲、偽善に、嫌悪と幻滅を感じたらしい。このパンフレットにほのめかされているように、フィールディングは、自分たちの協力が指導者たちから正当に報いられない点に不満を感じていたのは事実だっただろうが、その不満よりも、彼は、「反対派」のなかの、節操と人間的品位を欠く連中に、真に国を愛する者として、警告を発する義務を痛感したらしい。フィールディングはこのなかで、「反対派」の荷馬車と、ウォルポールの馬車が出くわす形象を用いて、反対派には、なんの統一的な、はっきりした政策と目的もなく、彼らの多くが、「公共心」のかわりに「野心、悪意、羨望、貪欲、謀叛心、失望、尊大、復讐心」などを心に抱き、ただウォルポールを追い出して

自分たちが彼に取って代ることのみを願い、自分のとくになれば、いつでも友人をすててウォルポールと同盟を結ぼうとしていることを暴露した。そして、「反対派」が、強引なウォルポールに、してやられるであろうと予言した。フィールディングが、自分の味方している「反対派」に対して、かかる、あいまいな態度をとったことは、決して裏切りではなかった。むしろ、フィールディングがつねにウォルポールを攻撃しながらも、このようなパンフレットを出して、自分の属する「反対派」の連中の多くの者の節操のなさ、みにくい権力欲、いやしい利己心を鋭く揶揄したところに、彼の栄光と真骨頂があったと云うべきだろう。フィールディングが、生涯、愛着を感じていたのは、かかる連中ではなく、善良で勤勉で、素朴な人びとであったから。

しかしフィールディングの予言ははずれ、ウォルポールの没落は近づいていた。一七四二年を迎えると、「反対派」の運動は効を奏し、議会における「反対派」の勢力は次第に力をまし、二月二日にウォルポールはその職を去り、九日に、オクスフォード伯（Earl of Oxford）の爵位を授けられた。

フィールディングの反ウォルポール活動は、上記のような形をとってきたが、ウォルポールの辞職後二十日たって、二月二十二日に、彼の『ジョウゼフ・アンドルーズ』が出版され、それから一年あまりたった四三年四月十二日に、彼の反ウォルポール意識が、もっともすぐれた形で結実した『ジョナサン・ワイルド』を含む『雑録集』が出版されたのであった。『ジョナサン・ワイルド』は、かかる長い争いの終止符として生み出された。

## 3

フィールディングが『ジョナサン・ワイルド』のなかで、ウォルポールをどんな風に諷刺したかは、この小説を考察する際に扱いたいが、さきにも記した通り、『ジョナサン・ワイルド』が諷刺小説としてすぐれているの

は、彼のウォルポールへの反撥が、一人の宰相への単なる反撥をこえ、世間で「偉大さ」と云われているものの実態を、すぐれた物語形式で追求嘲笑したところにある。だが、この「偉大さ」の剔抉暴露がウォルポールへの敵対をきっかけとしていたことは疑う余地がない。この小説をなんの基礎知識もなく読む場合に、われわれは、まず、彼がウォルポールをはじめ「偉大な」人間を、当時世間で評判になっていた大盗ジョナサン・ワイルドに擬した、その思いつきの卓抜さと機智にうならされるのであるが、しかし、この着想は、当時において、決して斬新奇抜なものではなかったようである。もちろん、フィールディングは、ジョナサン・ワイルドの生涯をそのまま利用するのではなく、これに立脚しながら、これをある程度ゆがめることによって、「偉大さ」の実態を、より完全に伝えることに成功したが、ウォルポールをワイルドになぞらえようとする着想そのものは、ごく一般的な試みにすぎなかった。

ワイルドは一七二五年五月二十四日にタイバーン(Tyburn)で処刑されたが、その生涯は人びとの好奇心をひき、新聞や種々のパンフレットがこれをみたした。そのことは、ディフォー(Daniel Defoe)が、ワイルドの処刑後、まず「彼の口から聞いた」と称する『故ジョナサン・ワイルドの生涯と行動の真実の物語』(*The True and Genuine Account of the Life and Actions of the late Jonathan Wild*)を出し、つづいて、ワイルドを処刑した裁判長レイモンド(Raymond)の秘書の筆になるものと称して、さらに詳しい『ジョナサン・ワイルドの生涯』(*The Life of Jonathan Wild*)を出版したことからも知られる。

ワイルドの生涯を扱った書きものは、ダドン教授が指摘しているごとく、[註四] ディフォーのパンフレットのように、その生涯と性格を如実に伝えようとするものと、これを諷刺的、象徴的に扱おうとするものとに分たれるのであるが、ウォルポールが政権を握ると、当時の反ウォルポール派のウィットたちにとって、貪欲で奸智にた

け、徒党の首領としてほしいままに振舞い、一般の人びとによく知られたワイルドは、ウォルポールを擬するのに好個の存在となった。

たとえば一七二五年五月には、はやくも「ミスト週間新聞」(*Mist's Weekly Journal*)の十二日号と十九日号に、ワイルドの性格と生涯を諷刺的に扱い、ワイルドを「偉大な人間」として描き、彼こそ、まさしく、そのプリンシプルにおいても行為においても、現代のウィッグ党員だときめつけた文章が掲載された。この論文とフィールディングの『ジョナサン・ワイルド』とが非常に類似しているので、フィールディングがこれを書き、のちに『ジョナサン・ワイルド』を書くのに利用したと推測する者さえいた。フィールディングは『雑録集』の「序文」[註19]で云っているように、『ジョナサン・ワイルド』を書くに当って参考としたものの中に、前記ディフォーの伝記などとともに、これらも含まれていたことは疑いがない。また、かの有名なジョン・ゲイ(John Gay)の『乞食オペラ』(*The Beggar's Opera*, 1728)は、故買人(けいばいにん)ピーチャム(Peachum)も追剝のマクヒース(Macheath)もワイルドをモデルにしたものであり、同時に二人ともウォルポールへのあてこすりを含んでいた。このようなワイルドとウォルポールとの対比、狡猾な泥棒と腐敗した政治家との対比は、その後もひきつづいて、反対派の書きものに現われ、ワイルドの名がうすれてしまった一七三八年にさえ、「コモン・センス」紙に、ワイルドの生涯を遠回しにウォルポールにあてつけた一文が出たほどで、一七四二年のウォルポールの失墜は、二人の偉大な人間の対比を完全なものにした。フィールディング自身もまた、さきに記したように、「チャムピオン」紙(一七四〇年三月四日号)の「名声」を扱った論文で、ワイルドを引合いにだし、ウォルポールを横目でにらみながら、名声は美徳とは無関係だと主張した。

このように見てくると、フィールディングの着想――ワイルドとウォルポールの対比――は、決して独創的な

ものではなく、むしろフィールディングは、ジャーナリストの感覚をもって、従来からよく行われてきた、世人に親しい対比を利用し、すでに書かれた種々の書きものからヒントをえながら、この対比を最も完全にして辛辣な形でおこなったと云えよう。それゆえ、この小説のすぐれている点は、その着想の目新しさではなく、その対比の巧妙さ、および、個人的対比をこえて、これをさらに高度な、「偉大さ」一般への諷刺に高めたところにこそ、あったと見なすべきであろう。

## 4

ウォルポールに対する諷刺が比較的濃厚であった一七四三年版の『ジョナサン・ワイルド』においてさえ、フィールディングは、ある特定の「偉大な人間」ではなく、ワイルドやウォルポール個人をこえた、偉大さ一般、世人が誤って偉大な人間と見なしがちな人びと全般の特質、つまり、彼に虚偽の偉大さと思えるものを痛烈に諷刺しようとした。『雑録集』の「序文」で、フィールディングは、「ある悪党でなく、悪が、私の主題である」(Roguery, and not a rogue, is my subject.) と云っている。また、フィールディングは、すべての人間性、あるいは、人間性そのものを悪とは見なさず、悪がしばしば偉大さの仮面をかぶり、人びとの上に立ちこの世を謳歌することがあると見た。「序文」で云っているように、彼は、ニュー・ゲイトは仮面をとった人間性にほかならぬとは考えないが、「偉大な人間のすばらしい邸宅は、しばしばマスクをかぶったニュー・ゲイトにほかならぬ」と考える。具体的には、フィールディングは『ジョナサン・ワイルド』のなかで、ワイルドとハートフリーを対置させ、これによって「偉大さ」と「善良さ」のドラマを展開し、両者の対照によって、それぞれの特質をさらにくっきりと鋭く浮彫りさせようとする。いわば、フィールディングの「偉大さ」の概念には、このように、

つねにそれと対照的に「善良さ」が対置される。『ジョナサン・ワイルド』で最も完全、かつ、具体的に展開された、この基本的テーマ、および、この小説中に示された「偉大さ」の概念と、これに対する反撥は、彼が『ジョナサン・ワイルド』を書く以前から、すでに彼の心中にはぐくまれていた。いわば、『ジョナサン・ワイルド』は、かかる思索の結果であると同時に、彼はこの小説を書くことによって、「偉大さ」と「善良さ」の観念を一層明確にさせたと云える――小説家は創作を通して、つねに、自己の考えを拡大深化させるのであるから。

この意味で、つまり、この小説は作者が、まずはじめに「偉大さ」の暴露という目的を有し、虚偽の「偉大さ」と真の「善良さ」を対立的に illustrate しようとする意図を持っていたという意味で、『ジョナサン・ワイルド』は、観念小説の部類に属するものであり、アーノルド・ケトル (Arnold Kettle) が『イギリス小説概論(1)』(*An Introduction to the English Novel*, Vol. I, 1951) のなかで、「life の文学」と対置させた「pattern の文学=moral fable」に属するわけであるが、ここで、われわれは、彼が「偉大さ」と「善良さ」について、どのような観念をいだいていたかを一瞥しておきたい。

『ジョナサン・ワイルド』で、フィールディングが「偉大さ」と「善良さ」を形成する諸要素をいかなるものと考えたかは、ワイルドとハートフリーの性格を分析することによって知られるのであるが、この詳しい考察はあとにゆずるとして、彼がこの小説で「偉大さ」と「善良さ」についてどんな風にのべているかを簡単に跡づけてみよう。

フィールディングは『雑録集』の「序文」のなかでも「偉大さ」と「善良さ」の問題にふれている。彼は、まず、「偉大さ」と「善良さ」がしばしば世間で混同されているのを歎き、人びとのうちには、偉大なもの、善良なもの、偉大にして善良なもの、の三通りがあるとし、最後のものこそ、人間性のうちで真に崇高なるものであ

って、人びとを愛、驚き、喜びをもってみたすと考える。古代ではソクラテス、プルータス、現代ではリトルトンのような人たちこそこれにあたるのである。善良な人間を構成するのは、慈悲、廉恥心、正直、慈善で、この善良なるものは、われわれに愛をひきおこさせる。偉大さは、善良なものがしばしば欠いている才能や勇気を有するが、善良さをまったく欠いており、自惚、見栄、尊大、残酷、あらゆる種類の邪悪さを含むのである。かかる偉大さの本質を暴露しようとする意図を、この書物は有していた。

本文においても、フィールディングは第一巻第一章で、「偉大さは、あらゆる種類の災害を人類にもたらすことに存し、善良さは人類から、かかる災害を除去するところにある」としている。アレグザンダー大王やシーザーたちは、途方もなく巨大な災害を遂行しようとする目的を持って、この世に生れ出たのである。「偉大さの真のしるしは、insatiability である」（第二巻第二章）が、偉大な人間は、かかる飽くことを知らぬ欲望と野心をもって人類に災害をあたえつづけるのである。そして、この「偉大な連中」は、「征服者、絶対君主、政治家、泥棒」に細分され、その偉大さは、己の利益のために使う他人の手の多少によって定まるのである（第一巻第十四章）。そして、「『征服者』であろうと、『暴君』であろうと、『政治家』であろうと、『泥棒』であろうと、真に『偉大な』人間を支えうるものは、ただ内心の栄光、偉大にして驚嘆すべき行為を行っているという、ひそかな意識」なのである（第二巻第四章）。かくて、偉大な人間と偉大な悪党は同義語であって、「偉大さは、権力、自惚、尊大、および、人類に害をなすことに存する」のである（第四巻第十五章）。

かかる「偉大さ」と「善良さ」の概念は、のちに跡づけるように、決して『ジョナサン・ワイルド』でフィールディングがはじめて述べているものではなく、それまでに彼が色々の書きもので、多かれ少なかれ、すでに主張してきたものであるが、ダドン教授も諸所で記しているように[註10]、偉大さについてのかかる見解も、当時におい

て、決して目新しいものではなかった。たとえば、一六六三年にボワロー（Nicolas Boileau, 1636—1711）は『諷刺詩』（*Satires*）のなかで、アレグザンダー大王たち、いわゆる英雄の支配欲にみちた野心を痛罵し、ポープ（Pope）は『人間論』（*Essay on Man*, 1733—4）の「書簡四」で偉大さについて論じつつ、アレグザンダー大王やチャールズ十二世の目的は人類を敵とすることだと非難した。特に十八世紀前半には、このチャールズ十二世の簒奪によって、ヴォルテール（Voltaire, 1694—1778）の『チャールズ十二世の歴史』（*History of Charles XII*, 1731）は広く読まれ、「偉大さ」を人類に災害を与えるものとする考え方は、大方の心に刻まれていたという。

それだから、われわれはフィールディングの「偉大さ」についてのヒューマニスティックな見解に心うたれはするが、かかる見解は――ウォルポールをワイルドに擬した場合同様――決してフィールディングの独創的な考え方ではなく、この場合にもフィールディングは、すでに展開されていたヒューマニズムの伝統に立ち、偉大な人間を呪詛する庶民の心を心として、この小説で、かかる偉大さの概念をより深化させたと考えるべきであろう。

さきに私は、フィールディングが『ジョナサン・ワイルド』で展開した観念は、急に形成されたものでなく、『雑録集』出版以前の書きもののなかで機会あるごとに吐露されてきたものだと述べたが、次にこれを簡単に跡づけてみよう。

一七四〇年十月十六日に、グスターヴ・アドラフェルド（Gustave Adlerfeld）の『スウェーデン王チャールズ十二世の軍事史』（*Histoire militaire de Charles XII roi de Suede*）の三巻からなる英訳が出たが、これは匿名であったにしろ、フィールディングがこの英訳の最初の部分をやったことは明らかだとされている。フィールディングがヴォルテールの書物を読み、[註19] さらにこの書物を、反訳するために通読したであろうことは、彼の

暴君や征服者への呪詛と憎悪を深め、同時に、彼の「偉大さ」への探究を刺戟したことは事実であろう。

フィールディングは、早くも、「チャムピオン」紙（たとえば、一七三九年十一月十七日号や一七四〇年三月四日号）で、アレグザンダー大王を非難しているが、[註64] 一七四一年一月七日には、『真の偉大さについて』[註65]（*Of True Greatness*）を出版して、「偉大さ」についての見解を明らかにした。この詩は――詩としてはつまらぬものであったが――ドディントン（George Dubb Dodington）（彼は最初ウォルポール内閣のもとで国家財政委員をつとめていたが、一七四〇年にアーガイル公爵（the Duke of Argyll）に従って「反対派」に参加し、政府側の新聞、パンフレットで変節者とののしられたが、一方、機智に富み、古典学者で、文学者たちのパトロンとなっていた）に捧げられた。この詩で、まずフィールディングは、一般の人が「偉大さ」の何たるかを知らぬのに驚きを表明する。「偉大さ」は、殺りくや略奪によって恥ずべき栄光をえたアレグザンダーやマホメットのような征服的英雄に求められるべきものではないのである――人類を救うために武器を取った場合は別だが。また、「偉大さ」は、おべっか使いどもにかこまれて、威厳ありげに装う権力者にも、人間の世界を軽蔑する傲慢な羨ましがりの隠者や皮肉屋にも、能のないペダンティックな学者にも、利己的な金持商人のうちにも見出されるべきではないのである。では真の偉大さはどこに存するか。「真の偉大さは、職業、党派、地位にかかわりなく、気高い心のなかにのみ住む」のである。そして、フィールディングがここで真に偉大な人間として推賞しているのは、Latitudinarian の指導者ベンジャミン・ホウドリ（Benjamin Hoadly, Bishop of Winchester）、アーガイル公、高等法院首席裁判官（Chief Justice of the King's Bench）のサー・ウィリアム・リー（Sir William Lee）、それに、カーテレット（Carteret）、チェスターフィールド、リトルトン、およびドディントンなのである。

フィールディングは、同じく『雑録集』に収録されたエッセイ『無について』（*An Essay on Nothing*）のな

かでも、野心のむなしさを述べ、多くの民衆を略奪・虐殺したアレグザンダーや、シーザーや、その他かかる種類の英雄たちが、その労苦の結果として得たものは「無」であると主張している。

『雑録集』のなかには、『アレグザンダー大王と犬儒哲学者ディオゲネスの対話』(*A Dialogue between Alexander the Great and Diogenes the Cynic*)なるエッセイも収められたが、ここで、フィールディングは、征服的な英雄をも、ディオゲネス流の皮肉屋をも、ともに、虚偽の偉大さと見なして、これを嫌悪した。征服的な英雄は、果しのない、とどまることを知らぬ、栄光と名声への野心にとらえられ、自分でさえ幸福と満足を味わうことなく、残虐と破壊をかさねて行く。一方、世間から身を引いて、世間をあわれむ皮肉屋も、そのにがにがしさの根底に持っているのは、羨望であり、その羨望から憎悪がうまれ、その憎悪は、ののしりを生むのである。フィールディングは征服者の偉大さをも、皮肉屋の偉大さをも、ともにいとわしいものと考えた——前者は人類に対し、より有害であり、後者は、より軽蔑すべきものではあるが。

またフィールディングが、アレグザンダー大王やチャールズ十二世を憎悪したことは、彼の『この世からあの世への旅』で、死の神(**the King of Terrors**)がこの二人を従えていることからも知られる。

かかる詩やエッセイ中にのべている「偉大さ」についての考え方は、『ジョナサン・ワイルド』のなかでワイルドの形象を通し、一層具体的に語られると同時に、一層深化され系統化されるのであるが、フィールディングが、この「偉大さ」に対して、常に対照的に賞揚したものは「善良さ」であった。この徳は、彼が全小説で賞揚し、肯定的人物に賦与している徳であるが、彼は「チャムピオン」紙の一七四〇年三月二十七日号[註19]においても、これについて論じている。フィールディングによれば、「善良さ」(**Good Nature**)は、悪を罰することから尻ごみするような、愚かしい、センチメンタルな優しさのことでも、また、自分の権利を主張しなかったり、侮辱にむくい

たりしないような臆病さのことでもなく、「善良さとは、人類の幸福を喜び、その不幸を憂慮し、できるだけ前者を招来して後者をふせぎごうと願うこと」なのである。それゆえ善良さには識別的能力—判断力が必要なのであって、判断力を有さぬ愚人が善良であることは不可能なのである。

また、フィールディングは、『雑録集』に収められた他のエッセイ『人間の性格を知ることについて』(*An Essay on the Knowledge of the Characters of Men*)で、「善良さ」は、慈悲深い、やさしい気性であって、われわれをして、他人の不幸をしみじみと思いやり、その幸福を楽しみたい気持にさせる。従って、他人の幸福を増進させ、不幸を妨げることにわれわれをかりたてるものだとした。

さらに彼は、やはり『雑録集』に収められた『妻をえらぶことについてある友人に』(*To a Friend on the Choice of a Wife*)なる詩——これは一七四二年の夏リトルトンが結婚したのをたたえたものと考えられている——で、理想的な妻の第一の特質は、美しいことでも、機智でも、子供っぽい態度でも、富でも、高貴な家柄でもない。悪徳といやしさを軽蔑していて、善良さがそのやさしい心を飾っていなければならぬことを強調した。

『雑録集』には『善良さについて』(*Of Good Nature*)という詩があるが、[註17] このなかで、フィールディングは、「善良さ」とは徳の本質をなすもので、「善をなすことの光輝ある渇望」(**the glorious lust of doing good**)と定義している。フィールディングは、一七四〇年一月三日号の[註19]「チャムピオン」紙で、徳(virtue)を定義して、「徳とは善をなすことの喜びのことであって、これ以上よい、徳についての一般的定義を私は知らない」と云っているから、彼にとって、「善良さ」と「徳」とは同じ一つものと見なすことができる。

『ジョナサン・ワイルド』のなかで、典型的な「偉大さ」を示すワイルドに対置され、この「偉大さ」に苦し

められつつも最後には勝利をえるハートフリーとその一家の者たちは、完全無欠な形における「善良さ」の具象化とは云えず、多くの弱点を具有しているかもしれないが、しかし「善良さ」の要素を多分にそなえており、彼らのうちに、われわれはフィールディングの「善良さ」に対する観念をうかがい知ることができる。ハートフリーがどのような性格を持っているか、また、「偉大さ」と「善良さ」の対立を、どのような形で具体的に展開したかは、のちにそれぞれの人物を考察する場合に分析してみたいが、いま跡づけて来たように、「偉大さ」と「善良さ」の対立は、『ジョナサン・ワイルド』の出来上る前から、すでに、彼の心のうちに一つの構図として存在したと云えよう。

いままで私が、クロス教授やダドン教授の書物に、まことに多くを負いながら、フィールディングの反ウォルポール的活動、「偉大さ」と「善良さ」についての彼の考え方などを跡づけてきたのは、彼のウォルポールをはじめとする「偉大な人間」への反撥と、「偉大さ」と「善良さ」についての観念とが、この小説を生む強力な発条となっていると考えるからにほかならない。『ジョナサン・ワイルド』を考える前に、いままで記してきたような、これが書かれた時期とか、彼とウォルポールとのかかわりあいとか、「偉大さ」と「善良さ」の対立とかいう問題の他にも考察して置くべきことは多くあるかもしれないが、私は、自分なりに、これらの問題をある程度跡づけてみたので、次には、この作品の考察に移りたいと思う。

註

① Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding*, Vol. I, Chap. IV, p. 113.
② Homes Dudden, *Henry Fielding*, Vol. I, Chap. IV, p. 133.
③ W. L. Cross, *op. cit.*, Vol. I, Chap. X, pp. 263—4.

H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. X, pp. 255—7.

④⑤⑥⑦⑧⑨ これらの序は *The Works of Henry Fielding*, ed. Leslie Stephen, Vol. V に再録されている。

⑩ H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, Chap. XVII, p. 452.

⑪ この「序文」は *The Works of Henry Fielding*, ed. Leslie Stephen, Vol. VII に収録されている。

⑫ H. Dudden, *op. cit.*, Vol. I, pp. 428—9, pp. 464—5.

⑬ *Ibid.*, Vol. I, Chap. XI, p. 290.

⑭ *Ibid.*, Vol. I, Chap. XV, p. 429 参照。一七四〇年三月四日序は *The Works of Henry Fielding*, ed. Leslie Stephen, Vol. V に再録されている。

⑮ これは *The Works of Henry Fielding*, ed. Leslie Stephen, Vol. VII に収められている。

⑯ *Ibid.*, Vol. V に収録。

⑰ *Ibid.*, Vol. VII に収録。

⑱ *Ibid.*, Vol. V に収録。